

耳で聴くアート

SMAART 2023年度 記録集

SMAART 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート 2023: 耳で聴くアート 記録集



佐賀大学
芸術地域デザイン学部

令和5年度文化庁 大学における文化芸術推進事業
佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート～
オーラルコミュニケーションを核としたアートマネジメント人材育成事業

Saga Mobile Academy of ART 2023 :
Art Works to Listen and Imagine



ごあいさつ Introduction

「佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート」[Saga Mobile Academy of ART 略称：SMAART] は、佐賀および周辺地域のアートマネジメント人材の育成を目指すプロジェクトで、「文化庁 大学における文化芸術推進事業」として取り組まれるものです。

本プロジェクトでは地域の方々を対象に 2017 年度からセミナーと実践的な活動を展開するとともに、地域の文化芸術に関する情報や人材が集まるネットワークづくりをプロジェクトの柱としてきました。

昨年度より新たに、従来の美術館における「視覚」優位の美術の在り方、および大学における「紙媒体」優位の知の蓄積の在り方へのオルタナティブとして、美術から視覚を取り除くことで逆に「見えてくる」ことに焦点を当てつつ、美術を楽しみ、伝え、届ける人材を育成するべく、それぞれ3つのアプローチからネット配信によるラジオ番組作りに取り組んでいきます。ひいては目の見える人・見えない人の共生も含め、多様な価値観を認め合うしなやかな社会の構築にむけてのコミュニケーションツールとしてアートを捉え、マネジメントできる人材の育成に取り組めます。

本書は SMAART の 2023 年度の活動についての記録です。「芸術で地域を拓き、芸術で世界を拓く」をモットーに佐賀大学が 2016 年度に開設した芸術地域デザイン学部によって企画運営される本プロジェクトの記録をどうぞご覧ください。

2024 年 2 月

佐賀大学芸術地域デザイン学部

目次 Contents

ごあいさつ 2

SMAART について 4

2023 年度スケジュール 6

活動 1

アートを学ぶ 7

～音声メディアを活用した美術教育プログラムの検討・試行

活動概要 8

活動 2 わかばリポーター講座

アートを伝える人の育成 15

～耳で聴くアート放送局

わかばリポーター講座 16

活動 3 わかばキュレーター講座

アートを届ける人の育成 31

～耳で聴くアート展準備室

ゲスト講師レクチャー 32

わかばキュレーターによる企画会議 36

まとめ 47

アドバイザーコメント 48

「アートのモバイル化と孤独について」花田 伸一 50

音声コンテンツ一覧 51

事業成果物 52

講師紹介 53

SMAARTについて

About SMAART

佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート (Saga Mobile Academy of Art = 略称: SMAART) は、佐賀および周辺地域のアートマネジメント人材の育成を目指すプロジェクトです。セミナーや実践活動を展開するとともに、地域の文化芸術に関する情報や人材が集まるネットワークをつくります。

2023 年度 基本コンセプト

- 電波上・ネット上における「音声メディア」に着目したキュレーションの可能性を模索する。
- 作品の現物や現実のホワイトキューブの制約にとらわれない新たなアートマネジメントのモデルを確立しながら、美術館および学芸員の活動領域を新たに開拓・拡張・更新していける人材を育成する。

本年度は昨年に引き続き 3 つの柱で活動を展開

活動 1 アートを学ぶ

～音声メディアを活用した美術教育プログラムの検討・試行

音声メディアによる美術教育（表現・鑑賞）の可能性について、美術教育関係者にヒアリングをしながら意見交換を重ね、次年度に展開する美術教育プログラムに向けての教材開発や試行的実践に取り組んだ。

活動 2 アートを伝える人の育成

～耳で聴くアート放送局

アートの魅力を音声で伝えるコンテンツを作成・発信できるメディア人材を育成。
メディア研究者とラジオディレクターによる指導・助言を受けながら、受講生が各自で音声コンテンツを作成した。

活動 3 アートを届ける人の育成

～耳で聴くアート展準備室

キュレーションの新たな領域を模索する一つの試みとして、音声メディアを主体とした美術展の企画・発信ができるキュレーターを育成。

令和 6 年度「耳で聴くアート」展企画の参考のために、ゲスト講師から過去の活動事例や今後のアイデアについて聞いたり、ラジオディレクターによる監修のもと、受講生が「耳で聴くアート」展キュレーションの可能性をめぐるディスカッションおよび試行コンテンツ作成に取り組んだ。

SMAART2023：耳で聴くアート

Saga Mobile Academy of ART 2023: Art Works to Listen and Imagine

音声メディアを中心とした美術作品発表・鑑賞のあり方を探り、 発信できるアートマネジメント人材を育成するプログラム

概要

音声メディアによる美術教育(表現・鑑賞)の可能性について、

- 美術教育関係者にヒアリング
- 美術教育プログラムに向けての教材開発・試行的実践

対象：高校美術教員・高校生

育成イメージ

音声メディア(IT機器・ネット機器ほか)を活用した美術教育を担える美術教員、美術関連への進学・就職に関心を高め進路を検討する高校生

実施プログラム

- 教員・生徒・ほか団体(美術部等)にヒアリングを行う
- ヒアリング先で下記のいずれかを試行

- 実践 2022年度の音声作品コンテンツを参考に「耳で聴くアート」の表現に挑戦
- 鑑賞 2022年度の音声鑑賞コンテンツを聞いて想像したイメージ図を描いてもらう



→ これらの成果をもとに教育現場で使える教材案を作成

→ 2024年度に活用

活動1

アートを 学ぶ

音声メディアを活用した
美術教育プログラムの
検討・試行

活動2

アートを 伝える

わかばリポーターによる
音声コンテンツ作り

活動3

アートを 届ける

耳で聴く
アート準備室

概要

「耳で聴くアート」展
開催に向けての情報交換および
実験的コンテンツ作成

対象：音声メディアによる美術展の
キュレーションに関心ある学生
社会人・企業の広報
コミュニケーション事業担当

概要

文化芸術情報を
話し言葉で伝えることの
できる人材を育成する

対象：ライター、リポーター、
ナビゲーター、パーソナリティ、
ディレクター、音声コンテンツ
(ラジオ、ポッドキャスト、ライブ配信等)、
企画制作、マスメディア、批評家
志望の学生・社会人等

育成イメージ

アートの魅力を音声で伝える
コンテンツを作成・発信できるメディア人材
(ディレクター、パーソナリティ、リポーター他)

【講師】 忠 聡太(メディア研究者) +
鶴田 弥生(ディレクター兼ラジオパーソナリティ)

実施プログラム

- 受講生によるコンテンツ作り
- 受講生によるコンテンツを実際の電波で放送

実施プログラム

将来の企画に向けてのレクチャー +
企画会議 + 実験的コンテンツ作成配信
【企画協力】 三好 剛平(三声会代表) +
花田 伸一(キュレーター / 佐賀大学 芸術地域デザイン学部准教授)

- ゲスト講師によるオンラインレクチャー → 音声のみアーカイブ配信
ゲスト講師から過去の活動事例や今後のアイデアについて話していただく
毛利 高孝(社会学者 / 東京藝術大学 大学院 国際芸術創造研究科 教授)
川上 幸之介(美術家・キュレーター / 金沢芸術科学大学 芸術学部 准教授)
藤 浩志(美術家 / 秋田公立美術大学 大学院 総合芸術研究科 教授、秋田市文化創造館館長)
榎本 野次(美術評論家 / 多摩美術大学 美術学部 教授)
中野 仁嗣(神奈川芸術文化財団[神奈川県民ホール / KAAAT 神奈川芸術劇場]学芸員)
田中 みゆき(キュレーター / プロデューサー / アクセンビリティ研究)

● わかばキュレーターによる企画会議
「耳で聴くアート」のキュレーションの可能性をめぐるディスカッションと試行実践

- わかばキュレーターによるコンテンツを実際の電波で放送

→ これらの成果をもとに本格的な

「耳で聴くアート」展を
2024年度に開催

全体

アドバイザー

- 濱田 庄司(ギャラリーコンパ)：視覚障害者の立場からの助言
- 若林 朋子(立教大学21世紀社会デザイン研究科)：事業内容・評価に関する助言
- 江頭 宗次郎：音声機材・技術に関する助言
- 副島 大輔：広報に関する助言

CONTINUE TO 2024

2023 年度スケジュール Schedule

活動1 | アートを学ぶ～音声メディアを活用した美術教育プログラムの検討・試行

- ・講師 花田伸一（キュレーター / 佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授）
- ・スケジュール
 - ～ 11 月 教員との事前打合せ
 - 11～12 月 高校にてヒアリング+ディスカッション
 - 12 月～1 月 高校にて試行実践（表現 or 鑑賞）

活動2 | アートを伝える人の育成～耳で聴くアート放送局

● わかばリポーター講座

- ・講師 忠聡太（メディア研究 / 福岡女学院大学講師） 鶴田弥生（ディレクター兼ラジオパーソナリティ）
- ・会場 佐賀大学本庄キャンパス（8/19のみ学外）
- ・スケジュール
 - 7 月 9 日（日） 14:00-17:00 オリエンテーション
 - 8 月 19 日（土） 10:00-17:00 [固定課題] 現地取材 於 福岡市美術館
 - 9 月 9 日（土） 10:00-17:00 [固定課題] パイロット版発表
 - 10 月 7 日（土） 14:00-17:00 [自由課題] 取材前会議
 - 10 月 28 日（土） 10:00-17:00 [自由課題] パイロット版発表
 - 11 月 11 日（土） 14:00-17:00 [自由課題] 完成版発表

活動3 | アートを届ける人の育成～耳で聴くアート展準備室

● ゲスト講師によるオンラインレクチャー（8～10月収録 順次公開）

- ・ゲスト講師 毛利嘉孝（社会学者 / 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授）
川上幸之介（美術家・キュレーター / 倉敷芸術科学大学芸術学部准教授）
藤浩志（美術家 / 秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科教授、秋田市文化創造館館長）
榎木野衣（美術評論家 / 多摩美術大学美術学部教授）
中野仁詞（神奈川芸術文化財団 [神奈川県民ホール / KAAT 神奈川芸術劇場] 学芸員）
田中みゆき（キュレーター / プロデューサー / アクセシビリティ研究）
- ・聞き手 三好剛平（三声舎代表 / ラジオ番組「Our Culture, Our View」プロデューサー）
花田伸一（キュレーター / 佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授）

● わかばキュレーターによる企画会議

- ・会場 佐賀大学本庄キャンパス
- ・モデレーター 三好剛平（三声舎代表 / ラジオ番組「Our Culture, Our View」プロデューサー）
花田伸一（キュレーター / 佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授）
- ・スケジュール
 - 9 月 8 日（金） 18:30-20:30 オリエンテーション
 - 9 月 22 日（金） 18:30-20:30 企画案の持ち寄り
 - 10 月 13 日（金） 18:30-20:30 パイロット版発表
 - 10 月 27 日（金） 18:30-20:30 ブラッシュアップ版発表
 - 11 月 10 日（金） 18:30-20:30 本発表
 - 11 月 24 日（金） 18:30-20:30 振り返り

※ 2023 年 6 月時点

活動1

アートを学ぶ

～音声メディアを活用した

美術教育プログラムの検討・試行



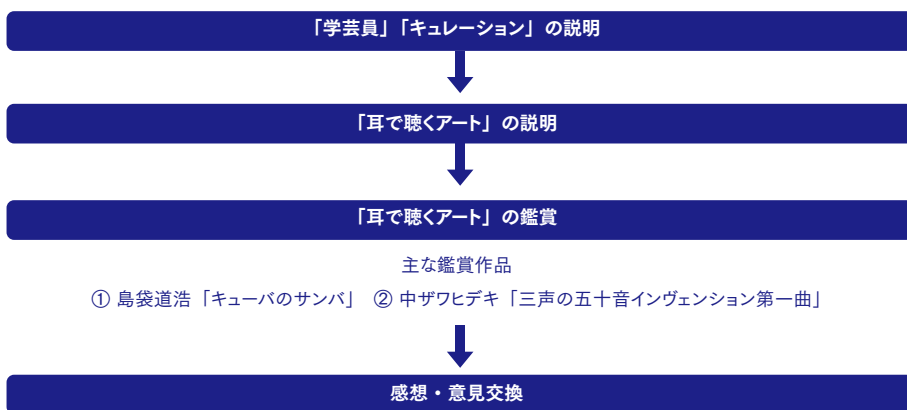
音声メディアを活用した 美術教育プログラムの検討・試行

活動概要

音声メディアによる美術教育（表現・鑑賞）の可能性について、美術教育関係者にヒアリングをしながら意見交換を重ね、次年度に展開する美術教育プログラムに向けての教材開発や試行的実践に取り組む

- 講師 花田伸一（キュレーター / 佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授）
- 対象 高校美術教員・高校生

ヒアリングの流れ



まとめ

ヒアリング先では、ほとんどの生徒が「耳で聴くアート」に初めて触れた。「耳で聴くアート」の受け取り方は様々で、自分なりのストーリーを想像する生徒や、聴きながら思い浮かべた情景が変わる生徒、他の生徒の意見で解釈が変わる生徒など、同じ音声作品でも解釈に幅があり、どのヒアリング先でも活発な意見交換が行われた。

美術鑑賞で「聴覚」に焦点を当てることで、想像の幅が広がり解釈の違いを楽しむ様子が見受けられた。この体験は、今後視覚だけに捉われない新しい表現のアート作品を楽しむきっかけになるであろう。

11月2日(木)

佐賀県立佐賀北高等学校

対応：東加代子 教諭 / 山中哲美 教諭



11月16日(木)・12月15日(金)・1月20日(土)

福岡県立太宰府高等学校

対応：松本了一 教諭

太宰府高校では2回のレクチャーを経て「耳で聴くアート」の表現に挑戦。生徒が各自で音声素材の作品制作に取り組み、1月20日に鑑賞会を行った。



11月30日(木)

長崎県立佐世保北高等学校

対応：桑野雅嗣 教諭



12月8日(金)

佐賀県立致遠館高等学校

対応：小林稔 教諭



12月14日(木)

佐賀県立有田工業高等学校

対応：井嶋玲和 教諭



12月19日(火)

福岡県立八幡中央高等学校

対応：新谷幸子 教諭



生徒の感想より

特別に美術館に行かなくても作品鑑賞がどこでも成立する点が面白く、新鮮な感覚でした。実際に耳で聴くアートが始まると、見慣れた美術教室が自然にアートを体験できる場が変わって行って、花田先生を中心とした空間は居心地が良くて、もっと続けてしてほしいかったです。終わってから自分の感じたことをもっとこんな風に発表したらよかったのに、など色々振り返りました。もう一度「耳での鑑賞体験」をしたいです。

同じ一つの音でも、それまで体験して知っている音は人によって異なるから、感じ方に差が生まれるのかな、と思いました。アーティストがどんな環境で何を考えながら制作し、実際は何の音だったのか、「作品の種明かし」も興味深かったのですが、友達の異なる考え方を聞くのはもっと楽しかったです。きっと生まれや育ちが違う人と体験すると、さらに驚きの連続で盛り上がるだろうと想像しました。

私が普段行っている絵画制作の手法のように、コンセプトに基づきながら音を材料として扱うのは難しかったです。しかし、絵の具や筆を使うというルールがない分、自分自身で音を作ることができるところが自由で面白いと思いました。

私は今まで音での表現をしたことがなかったので 耳で聴くアートという題名にとっても興味が湧きました。しかし、耳で聴くアートと聞いても音楽との違いが分からずやはり美術としての音の表現は音楽に劣るのではないかと考えました。しかし、実際に聴いてみると体験しないと分からない奥深さや趣があり、音での表現もしてみようと思いました。

アートといえば、絵画や彫刻、塑像など、形を持った視覚に訴えるものを思い浮かべる人が多いと思いますが、あえて“音”という目には見えないものをテーマにするという型に嵌らない斬新さに衝撃を受けました。音は定形を持たないだけに、聞く人によって様々な解釈があります。しかし講習会を通して、そこが耳で聴くアートの面白さだということがわかりました。常識やイメージに囚われず、常に新しい作品を生み出していく姿勢が、作品づくりの上で最も大切なものなのだと思います。

普段美術部員の中で作品を見てどう思ったかなどを話すこともあるのですが、その時よりもそれぞれの意見がバラバラで面白かったなと思います。そして、人は今まで生きてきた中で聞いたことのある音から想像して考えているんだなということもわかって面白かったです。

耳で聴くアートにははっきりとした形がないので、音楽よりも受け取った音を自分が思った通りに自由に解釈して落とし込めることができるとも素敵だと思いました。また、聴き手ひとりひとりの感じ方や思い浮かべたものが異なっていて面白かったです。そして思い浮かべたもののほとんどが言葉では表しにくいような、伝えにくいようなもので、もどかしくて、なんだかとても好きです。

私は今までアートは目に見える形のものだと勝手に思い込んでいましたが、「耳で聴くアート」を通して新しい考え方ができるようになりました。音によって人それぞれの解釈があってとても面白く感じました。個人的に思ったのは目で見るよりも耳で聴くほうが自身の中で想像が広がりやすいということです。絵画などとはまた違って今その状況にいるのはどんな人物で季節はいつでどこにいて何をして、ということの明確な正解がないので自分の中でその情景や物語が創りやすいかなと感じました。同時にそこが「耳で聴くアート」のよさなのだと考えました。全く今まで耳で聴くという発想がなかったので、新しい価値観と出会うには自分が新しいことを始めることが大切だなと講演会を通して学べました。

美しさとは人間が認知する感覚の一つであり、外見的や内面的、または物事や風景から感じる美しさなどがあります。しかし、美しさは主観的なものであるため、個人差があります。そのため美しさに共通要素があると考えました。たとえば、バランス、調和、自然の摂理に沿っている、未知のものに対する好奇心が刺激されることなどです。また、文化や時代背景、社会的な価値観などによる影響にも関係があります。それらは主観的なため定義することはできません。そのため耳で聴く体験は、私たちが普段感じることのできない音や響きを通じて、新しい世界を私達が持つ想像力や感性に訴えかけ、深く理解しました。

アートってなると絵だから視覚からしか楽しむ、感じるが出来ないものだと思っていましたが耳でも音としてアートを楽しむという発想そしてそれを実現出来てしまうことも含めて凄いなと思いました。耳で聞くアートというものがもっと広まれば生まれつきで目が見えない方だったり何らかの原因で見えなくなってしまった方でももう一度アートという楽しむことができ、そもそも出会えることが出来なかったものにも出会うことが出来る素晴らしい活動だなと思いました。また部員の中だけでも同じ音を聞いているのに感じ方が全く違ってそこも含めてアートの醍醐味だなと改めて感じました。これからの作品作りに活かして行けたらなと思います。素晴らしい公演ありがとうございました…!!

アートというものは目で見るものだと思っていましたが、「耳で聴くアート」は独創的で興味深かったです。耳で聴くとなると見るとは違った感性が必要になるので、解釈が人それぞれで楽しいと思いました。

耳だけを唯一の感受体として研ぎ澄ましていると、不思議なことに脳内では自動的に自分なりの解釈が展開するという、実に興味深い体験をしました。鑑賞後それぞれの解釈が披露され、たった今同じものを聞いたはずなのに、こうまで人によって感じ方が違うのかと驚く生徒たち。「正解がないのがアート」という、ある意味においては共感しあえないことが前提の世界にあって、受け止め方の違いを積極的に楽しめるといふ魅力が本レクチャーにはありました。

佐賀県立佐賀北高等学校 東加代子

本校の受講者は美術を専門的に学んでいる芸術科の生徒たちです。最初は、これまでに経験したことのない、音声を素材に作るアート表現という題材に戸惑っていました。しかし、花田氏の講義を受け、耳で聴くアートとは何かをそれぞれが解釈し、自分なりの方法を模索して作品制作を行うことで、新たなものの見方や考え方を広げる契機となりました。生徒作品の鑑賞会では、聴覚だけでなく五感を刺激するような個性的な作品が響いていました。

福岡県立太宰府高等学校 松本一

生徒たちの答えが、想像もつかないようなところから出てくることに、素直に驚かされました。生徒たちは音を聴いて自由に発想を膨らませ、シチュエーションを考えたり、物語風にしたりと、様々な答えを出していました。私は聴いた音が何なのか、経験上ある程度当てることはできましたが、生徒のように自由に発想を膨らませることができなくなっていることを痛感しました。受講者の年代で捉え方の傾向があるのかに興味がわきました。

長崎県立佐世保北高等学校 桑野雅嗣

音の芸術で考えると音楽に行き着いてしましますが、そこに知性のアプローチが加わるとアート体験になり得ることを実感しました。生徒たちも耳を研ぎ澄ませて音に聞き入っていたのが印象的でした。また、それぞれの感じていた印象や感想の違いの幅が広く多様であったことも「耳で聴くアート」と特徴かもしれないと感じました。それは私たちがまだ馴染みが薄い世界かもしれませんが、その楽しさは何度も味わったことがある世界でもあると感じました。

〈 顧問から見た生徒の反応 〉

音の作品が持つ世界を各々自分の言葉で探り当てながらコメントしている生徒が多かったです。音を奏でている具体的なものを想像したり、その音を持つ世界観（転生後の悲壮感のある世界）を空想してみたりと表現は様々でした。皆初めての体験に脳をフル回転させながら鑑賞していました。

佐賀県立致遠館高等学校 小林稔



活動 2

わかばリポーター講座

アートを

伝える人の育成

～耳で聴くアート放送局

わかばリポーター講座

アートを伝える人の育成 ～耳で聴くアート放送局

活動概要

アートの魅力を音声で伝えるコンテンツを作成・発信できるメディア人材（ディレクター、パーソナリティ、リポーター他）を育成

● **内容** 「話し言葉」でアート情報を伝える人材を育成する連続講座（6回）を行う。講師による指導・助言を受けながら、受講生が各自で音声コンテンツを作成。その成果は実際の電波（CROSS FM）で放送およびアーカイブ配信

● **講師** 忠聡太（メディア研究 / 福岡女学院大学講師）
鶴田弥生（ディレクター兼ラジオパーソナリティ）

● **スケジュール**

| | | |
|-----------|-------------|----------------------|
| 7月9日（日） | 14:00-17:00 | オリエンテーション |
| 8月19日（土） | 10:00-17:00 | [固定課題] 現地取材 於：福岡市美術館 |
| 9月9日（土） | 10:00-17:00 | [固定課題] パイロット版発表 |
| 10月7日（土） | 14:00-17:00 | [自由課題] 取材前会議 |
| 10月28日（土） | 10:00-17:00 | [自由課題] パイロット版発表 |
| 11月11日（土） | 14:00-17:00 | [自由課題] 完成版発表 |

● **会場** 佐賀大学本庄キャンパス（8/19のみ学外）

● **対象** ライター・リポーター・ナビゲーター・パーソナリティ・ディレクター・音声コンテンツ（ラジオ、ポッドキャスト、ライブ配信等）企画制作・マスメディア関係者・批評家志望の学生・社会人等（初心者もOK！経験者・セミプロもOK！）

● **募集人数** 選考有 8名程度（受講料：5,200円）
受講料

第1回

オリエンテーション

7月9日(日) 14:00-17:00

初回はオリエンテーションとして、講座の説明と今後作成するコンテンツの企画会議を行った。
講師の司会進行の元、様々なアイデアが飛び交った。



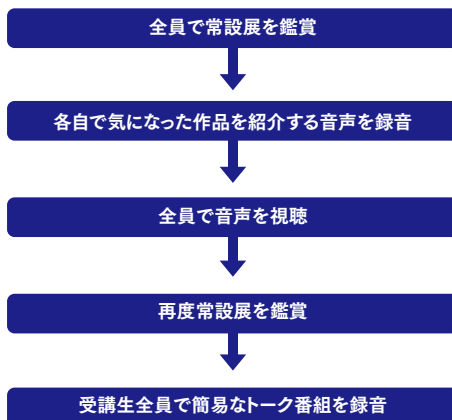
第2回

【固定課題】現地取材 於・福岡市美術館

8月19日(土) 10:00-17:00

受講生全員が同じ対象を取材する固定課題に取り組んだ。

当日の流れ







詳細レポート

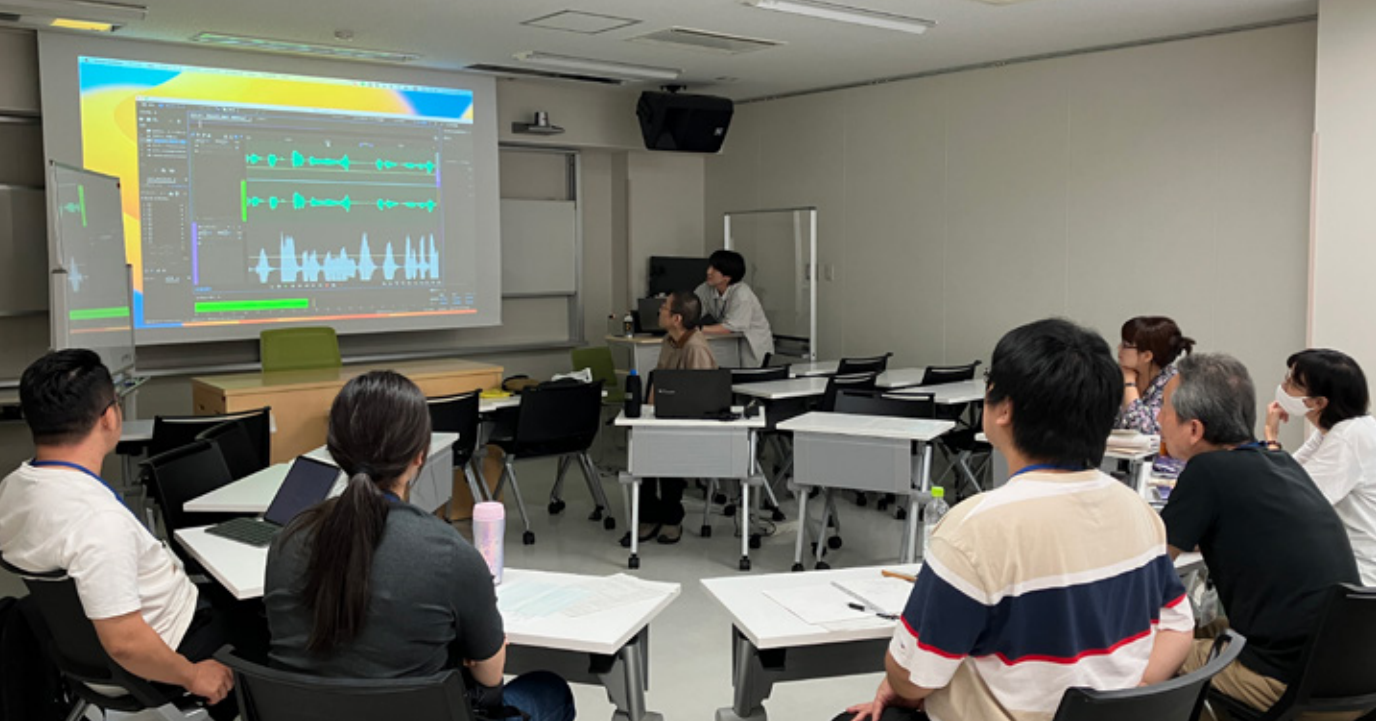
福岡市美術館の展示を音声番組で紹介するというテーマのもと行われました。

まずは常設展を見て個人的に気になる作品をピックアップし、その作品を紹介する音声を録音。それぞれの音源を全員で聴いてみます。他の受講生の方々の音声を聞いていると「こんな見方はしていなかったな」とかそもそも「こんな作品あったっけ?」といった感じで、自分が普段作品鑑賞に使っていなかった回路が繋がっていくのを感じます。

聴取後にもう一度作品を見に行ってみると、あたらしい鑑賞の取っ掛かりを持っている分、作品をより多面的に楽しめました。自分が選んだ作品でさえ1回目見た時とは少し異なった印象を受け、音声と美術がハイブリッドされる面白さを実感する機会となりました。

最後に、会場に用意されたラジオブースにて受講者全員で簡易なトーク番組を録音しました。お互い思いの感想や疑問点を対話形式で順番に進めていくというもので、気づけば録音を始めて1時間以上が経過。先生方にフィードバックをいただきつつ、この音声を編集してくるという課題でもって次回の講座に引き継ぐことになりました。

広報アドバイザー / 副島大輔



第3回

【固定課題】パイロット版発表

9月9日(土) 10:00-17:00

2回目の現地取材を元に各自で作成した課題(音声作品)を全員で視聴した。

ラジオでの放映を想定した話し方、聴き方や、音声を収録する際の注意点、編集する際の注意点など講師やテクニカルサポーターから具体的なアドバイスがあり「アートの魅力を音声で伝える」ための有意義な講座となった。



詳細レポート

今回の講座は佐賀大学の教室で開催。前回の講座で録音した音声を編集して持ち寄りました。もともと30分前後の長さの音声を8分ほどに編集してくるという課題でしたが、トークの取捨選択に本当に悩みました。それぞれの話者の話が一番魅力的に聴こえるところはどこか。この会話は削っても成立するのか。でも会話の間を切りすぎるとちょっと違和感が……。

右往左往しながらなんとか音声を提出し、編集した音声をみんなで聴きました。編集した音声にプラスで編集する音を追加してくる方や、逆に音声の長さをそこまで変えてこなかった方など音声へのアプローチが各々で違って面白かったですね。講座の最終成果がラジオ番組となる以上、この編集というフローが大事になるわけですが、編集を考えれば考えるほど、収録時の音声の重要性に気付かされます。素晴らしいシェフはありあわせの食材で美味しい料理を作れるでしょうが、素人の私たちはある程度レシピに沿った食材をきちんと用意しないと、食べさせられる料理にはならないんですね。最終目標とする番組を想像しながら、しっかり講座に取り組んでいきます。次回はいよいよ自分が作る番組を作っていき会。地平線にうっすらゴールが見えてきました。

広報アドバイザー / 副島大輔



第4回

【自由課題】 取材前会議

10月7日(土) 14:00-17:00

ラジオ番組の制作に向けて受講生各自が制作した企画書やパイロット版の音源を共有した。
SMAART 全体アドバイザーの若林朋子氏と濱田庄司氏もお迎えして直接助言を頂いた。





詳細レポート

今回の講座は普段の講師陣に加え、若林さんと濱田さんのゲスト講師2名を加えた5名から意見を頂ける貴重な時間となりました。それぞれが録音してきたパイロット版の音声を聞いたり、持ち寄った企画案について感想を述べあっていく流れで進みますが、ここまで来るとかなり具体性を持った「作品」になってきているので、「BGMは話し声の-20dbがちょうど良い」とか「ご自分のキャラクターを活かした脚本に変えてみては」などアドバイスや指摘も具体的です。

若林さんのフレッシュな目線からのご意見や、濱田さんの「目が見えない美術愛好家」という属性からのご指摘は、これまでとは違った切り口からの気づきが多くありました。中でも濱田さんの「音は積み上げていくものだから、途中からパッと入っていても理解できない。積み上げるためには情報を詰め込まないことが重要だ。」という言葉は私にとってかなり大きなインパクトで、視覚表現では当たり前に行われている引き算による情報設計が聴覚表現においても意識すべきことであることを痛感させられました。

言われてみれば当たり前の話で、ギチギチに詰め込まれた情報を叩きつけられても、思考するどころか理解することさえおぼつかないですよ。

広報アドバイザー / 副島大輔

第5回

【自由課題】パイロット版発表

10月28日(土) 10:00-17:00

前回の講座を経て作成したパイロット版の音声を視聴した。



詳細レポート

講座も残すところ2回となり、今回は全員のパイロット版音声が届きました。個性豊かな作品ばかりで、「アートを伝える」となったときに自分がどれほど凝り固まった思考でいるかということを実感させられます。講師陣からいただく表現についても内容をブラッシュアップするためのよりミクロなものになってきましたね。

今日の講座のキーワードは「主観」と「自分が感じたこと」だったように思えます。これらは講座の最序盤から繰り返し言われてきたことではありましたが、どこを削ってどこを残すべきかという編集段階に入った今こそ重要性が分かってきました。

ついつい客観的な事実を述べないという気になりますが、血の通った作品であるためには自身の視点というのが欠かせません。特に受講生の方々はそれぞれ独自の目線をお持ちなので、それを活かさない手はありません。……が、自分が持っている視点が価値あるものなのかというのは自分では意外と分からないですね。私が作っている音声についても、思ってもみないところが褒められることが少なくありません。他の受講生の方もそのようで、あまり自信がなかったところを褒められて逆に肩透かしを食らっているような感じでした。

次回はよいよ完成版を持ち寄る会。編集を詰めていく作業はちょっと億劫ですが、他の受講生の方々の作品に引けをとらないような音声をなんとか用意できればいいな～と思います。

広報アドバイザー / 副島大輔

第6回

【自由課題】完成版発表

11月11日(土) 14:00-17:00

受講生作品の完成版の試聴を行った。講師陣の親身なアドバイスもあり、受講生の作品もよりブラッシュアップされた。



詳細レポート

わかばりポーター最後の回。各々が完成した音源を持ち寄って振り返る会ということでしたが、「オンエアまでにここを修正してみてもいい」というアイデアをもらいつつ進行了。講師陣からのフィードバックは主に冒頭のところについてが多かったように感じます。4分という限られた時間ですが、ラジオ番組全体の尺が60分であることから考えるとそこそ長い時間があります。だからこそ、最初でリスナーにグッと食いついてもらうための冒頭の重要性を力説されていました。最終的に提出された作品たちは、パーソナリティ独自の視点にあふれており、その名の通り「人格」を象徴するようなものばかりでした。みなさん本当に素敵な作品だったので、願わくば1度きりではなくて連続して放送される番組だったらなと思ってしまいます……。私個人的にも自分たちの強み(?)を存分に生かした楽しい番組が提出できたと思います。スピーカーの向こうのリスナーさんや、シンプルだからこそ難しい音声というメディアにしっかり向き合うことができた2ヶ月ちょっとでした。(制作に協力してくれた朝倉くん、ほんとにありがとう)

広報アドバイザー / 副島大輔



ラジオ収録の様子

わかばリポーター講座の受講生作品を紹介する特別番組「耳で聴くアート2023リポーター講座ラジオで成果発表展」は、12月3日（日）CROSS FMのスタジオにて収録が行われた。司会・進行はわかばリポーター講座の講師でもあるディレクター兼ラジオパーソナリティの鶴田弥生氏が行い、同じく講師の忠聡太氏（福岡女学院大学）と「耳で聴くアート」の企画監修の花田伸一准教授が出演した。

特別番組はCROSS FMにて12月17日（日）16:00～17:00の時間帯で放送された。同番組は後日SMAART公式YouTube、公式サイトにも公開された。



講師コメント



忠聡太 (福岡女学院大学 人文学部 メディア・コミュニケーション学科 講師)

十人十色の作品が出揃った 2022 年度に引き続き、「わかばリポーター講座」に講師として参加いたしました。CROSS FM での放送を見据えた本年度は、実際の電波に乗ることを意識して受講者にややブレーキがかかってしまうのでは……と危惧したのも杞憂に終わり、みなさんの想像力は限られた枠組のなかでこそ、縦横無尽にはずんでいました。その弾道は、スーパーボールをせまい部屋の壁に全力投球したかのごとく予測不能で、あの手この手が飛び出る講座では毎回新鮮に驚くばかり。昨年度から継続して受講していただいた方々の頼もしさはさることながら、本年度は中国からの留学生であるコウさんが新たに一座に仲間入りした意義も大きく、世代・性別・出身国も違う受講生が集まったがゆえに、講座にプロトタイプを持ち寄る段階で幅広いリスナー層を自然と意識することができていたのではないのでしょうか。結果として、ふとチューニングを合わせたリスナーでもしっかり共鳴/共振できるような、パーソナルながらも間口の広い作品が出揃いました。そして全 6 回の講座を通じて、無軌道ともいえるアイディアの数々をたがいにしっかり傾聴し、そのうえで素直に肯定しあえる信頼関係をより強く築けたことが何よりの成果です。今後はそうした講座中の熱そのものを伝えることを意識しつつ、本講座の成果を聴いてくださった方々を巻き込めるような方法をさらに模索していきたいです。



鶴田弥生 (ディレクター兼ラジオパーソナリティ)

受講生の経験や特性、希望を加味し、今年度の目標達成に向け効率的に、しかし自由な意見交換の時間も大切に、講義を進めることができましたと感じています。受講生自身がレポートする対象を決め、カタチに落とし込む作業を一つずつクリアしながらパッケージするまでの一連を学ぶことは、各作業の理解と質を上げ、それらを共有することで、アートとの向き合い方の新しい視点を獲得し素晴らしい成果物につながりました。特に、オーラルコミュニケーションでの表現や、ラジオ放送をすることで生じる考慮が必要になる事柄について、受講生は当初「制約」と捉えがちでしたが、本事業の中で、対象アートへの理解を深めることや、より引き立つ個性につながり、発信することで得られるアートとの関りの喜びも感じられたようでした。

今後は、発信したもののフィードバックを得られる工夫や、受講生の継続活動につながるサポートを強化することで、本講座がより地域のためにも役立つものになると考えています。

受講生コンテンツ



28'30"

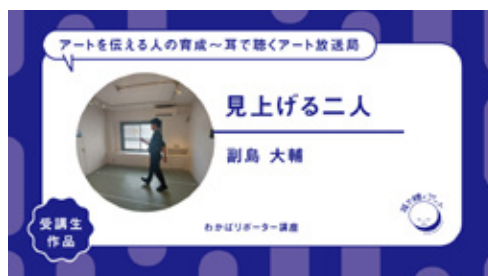
カメラ アイ

- ネット限定 スペシャルコンテンツ版 -

中尾 絵里

アートと写真が大好きな福岡県民 中尾絵里が、「ある巨匠」の写真をご紹介します！

「カメラ アイ」フルバージョン(WEB版)のほうでは、作品をご覧になった花田 信一さん、井上 佳子さんへのインタビューもあわせてお聴きいただけます。どうぞ最後まで耳を澄ましてお楽しみください♪



5'06"

見上げる二人 (みあげるふたり)

朝倉 隆平 / 副島 大輔

建築が好きな二人組、副島と朝倉が九州国立博物館(福岡県 太宰府)を建築の目線から楽しんでいる音声です。



36'30"

地域とアートの繋ぎ方

—つなぎ美術館インタビュー—

高 沛遙

小さい町に公立美術館?!
美術館の活動、またその裏の話を聞きましょう!
ということで、津奈木町つなぎ美術館の学芸員「楠本智郎」氏にインタビューしました!
その内容をどうぞお楽しみください!



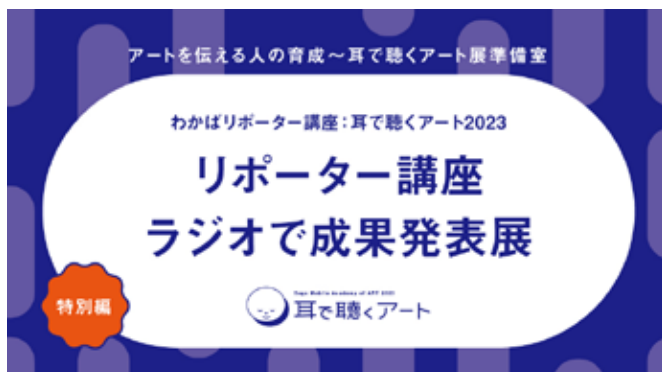
8'58"

ヨルノムコウガワ

古賀 隆正

モノクロームのプリントはいつも私をどこかとおい世界へつれていってくれます
それが時には
むかし見た夢の風景であったり
そういうこともたまにあります

ラジオ放送版



耳で聴くアート 2023 リポーター講座
ラジオで成果発表展（アフタートーク付）
【CROSS FM】

59分35秒

耳で味わうアートの世界。
聞こえてくる情報から、どんな絵や状況が浮かんでくるのか、ぜひお楽しみください。
インターネットでのみ公開している「特別編」では、収録後のアフタートークをお楽しみ頂けます。



受講生の感想より

相手の本音を引き出すにはその前に自分の熱意を伝えることが大事、ということが分かりました。最初は「音声コンテンツ」を作ろうとしても、どんな内容を作るか、難しく感じました。「ことば」でビジュアルな作品を説明するか、「音楽」で「説明」するか、それぞれの力が違います。でも最後まで参加させていただき、音声コンテンツの役割が少し分かるようになりました。よかったです。ちょっと意見ですが、講座で一旦、アイデアを固まってから進めるのがいいかなと思います。例えばパイロット版作成→完成版作成までもう一回講座を挟んだほうが、前回の意見を含めて調整した案を固めることができると思います。

.....

昨年の講座より難しく感じました。時間の制約があるラジオ番組・ネットラジオの違い、今まではどちらかといえば通常のラジオ番組の方が良いなと思っていましたが、好きな時間に好きな人だけ時間を気にせず制作できるネットラジオも良いなと思うようになりました。同じものを見たもの同士が話すと言明不足になりやすいという点が逆に映画や絵画などネタバレしたくないものを説明する時にいいなと思えたり新たな発見がありました。あとは自分が写真を撮ったり、音を録ったりする時の傾向も知ることができて良かったです。

.....

雑談の中にもテクニカルなワードが入ってくる。そのテンションがたまらない。技術的なもの P.A 関係も含めて学ぶ機会があればよいと思う。今後の講座に期待します。



活動 3

わかばキュレーター講座

アートを

届ける人の育成

～耳で聴くアート展準備室



わかばキュレーター講座

アートを届ける人の育成 ～耳で聴くアート展準備室

ゲスト講師レクチャー

講座概要

キュレーションの新たな領域を模索する一つの試みとして、音声メディアを主体とした美術展の企画・発信ができるキュレーターを育成

-
- **内容** 今後の「耳で聴くアート」展企画の参考のために、ゲスト講師から過去の活動事例や今後のアイデアについて聞く。レクチャー音声のみアーカイブ配信
-
- **ゲスト講師** 毛利嘉孝（社会学者 / 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授）
川上幸之介（美術家・キュレーター / 倉敷芸術科学大学芸術学部准教授）
藤浩志（美術家 / 秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科教授、秋田市文化創造館館長）
榎木野衣（美術評論家 / 多摩美術大学美術学部教授）
中野仁詞（神奈川芸術文化財団 [神奈川県民ホール / KAAT 神奈川芸術劇場] 学芸員）
田中みゆき（キュレーター / プロデューサー / アクセシビリティ研究）
-
- **聞き手** 三好剛平（三声舎代表 / ラジオ番組「Our Culture, Our View」プロデューサー）
花田伸一（キュレーター / 佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授）
-
- **対象** 音声メディアによる美術展のキュレーションに関心ある学生・社会人企業の広報・コミュニケーション事業担当など（初心者もOK!）
-
- **募集人数** アーカイブ配信：無料
受講料

ゲスト講師

毛利嘉孝

社会学者 / 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授

今回のゲスト講師レクチャーは、毛利嘉孝氏から収録を開始した。視覚と聴覚の対比について様々な視点からレクチャー頂いた。



ゲスト講師

中野仁詞

神奈川県芸術文化財団 [神奈川県民ホール / KAAT 神奈川芸術劇場] 学芸員

続いての収録は中野仁詞氏。美術×音楽×文学×演劇の領域横断性について、中野氏ならではの視点で語って頂いた。



ゲスト講師

藤浩志

美術家 / 秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科教授、秋田市文化創造館館長

3人目の収録は藤浩志氏。藤氏の経歴も含め、レクチャーそのものが「耳で聴くアート」で、終始笑いの絶えない収録となった。



ゲスト講師

田中みゆき

キュレーター / プロデューサー / アクセシビリティ研究

4人目の収録は田中みゆき氏。打ち合わせを終え、収録が始まると画面オフの状態に。その理由・意図もレクチャーの中で明かされる。



ゲスト講師

川上幸之介

美術家・キュレーター / 倉敷芸術科学大学
芸術学部准教授

5人目の収録は川上幸之介氏。現代アート×バンク×耳で聴くアートの関係性について、川上氏の視点でレクチャー頂いた。



ゲスト講師

榎木野衣

美術評論家 / 多摩美術大学美術学部教授

最後の収録は榎木野衣氏。佐賀大学にて公開収録を行った。目を閉じて想像することの魅力と危うさについて、語って頂いた。



わかばキュレーター講座

アートを届ける人の育成 ～耳で聴くアート展準備室

わかばキュレーターによる企画会議

講座概要

- **内容** 講師による指導・助言を受けながら、受講生が「耳で聴くアート」展キュレーションの可能性をめぐるディスカッションおよび試行コンテンツ作成に取り組む。その成果は実際の電波（LOVE FM）で放送およびアーカイブ配信

| ● スケジュール | 9月8日(金) | 18:30-20:30 | オリエンテーション |
|-------------------------|-----------|-------------|-----------------|
| <small>※実際の進行状況</small> | 9月22日(金) | 18:30-20:30 | 企画案の持ち寄り |
| | 10月13日(金) | 18:30-20:30 | パイロット版発表 1回目 |
| | 10月27日(金) | 18:30-20:30 | パイロット版発表 2回目 |
| | 11月10日(金) | 18:30-20:30 | ブラッシュアップ版発表 1回目 |
| | 11月24日(金) | 18:30-20:30 | ブラッシュアップ版発表 2回目 |

- **モデレーター** 三好剛平（三声舎代表／ラジオ番組「Our Culture, Our View」プロデューサー）
花田伸一（キュレーター／佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授）

- **会場** 佐賀大学本庄キャンパス

- **対象** 音声メディアによる美術展のキュレーションに関心ある学生・社会人企業の広報・コミュニケーション事業担当など（初心者もOK!）

- **募集人数** 講座：選考有 8名（受講料：3,700円）
受講料



第1回

オリエンテーション

9月8日(金) 18:30-20:30

「耳で聴くアートとは」、「そもそもアートとは」「キュレーションとは」、などなど、参加者同士で深い議論を行った。



詳細レポート

初回が佐賀大学にて開かれました。受講生の方々や講師の三好さん・花田先生それぞれの思いや講座でやってみたいことを共有しながら、この講座自体がどこに向かっていくかを考えていく時間となりました。音声を活用した美術作品の例を見ながらみんなで議論していくのですが、音声というメディアの「何でもできそうだが、何でもはできない」という塩梅に、視覚芸術とは角度の違う面白さや可能性を感じます。次回までの課題は音声を使ったアートの企画検討。三好さんは「企画を考えるとときはとりあえず10個くらい考えたほうがいいよ」と言われていたのですが、そんなボンボン出てくるものでもないわけで……。

広報アドバイザー / 副島大輔

第2回

企画案の持ち寄り

9月22日(金) 18:30-20:30

受講生が考案した「耳で聴くアート」展の企画書の講評会及び議論を行なった。



詳細レポート

前回に引き続き会場は佐賀大学。各々が持ち寄った企画案を発表しながら、講師の方々からフィードバックをもらうという方式で進行していきます。私も課題に取り組みましたが、かなり難しかったです。そもそも「音声で完結する美術」というコンセプトが前衛的で、インプットしようにも前例が乏しいこと。そしてキュレーターという立場をちゃんと理解できていないと、作家に対してリスペクトを欠いた企画になってしまうこともありますし、場合によっては自分(キュレーター)と作家の境界が曖昧になってしまいます。招聘する作家の作家性や音声というメディアにしかできないこと、そしてなによりその作品を通じて表明したいことを考える必要性を痛感しました。さて、次回の講座までどこまで企画をブラッシュアップできるのでしょうか。

広報アドバイザー / 副島大輔

第3回

パイロット版発表1回目

10月13日(金) 18:30-20:30

企画書のブラッシュアップやパイロット版の音声について意見交換を行った。



第4回

パイロット版発表2回目

10月27日(金) 18:30-20:30

前回に引き続き、作品の進捗等意見交換を行った。



詳細レポート

前回の講座を踏まえてブラッシュアップした企画案やパイロット版の音声を持ち寄られました。これまで2回の講座ではツツツの壁をよじ登ろうとするような、どこから攻めていかわからないような空気が漂っていましたが、ある程度実現可能性のある案が持ち寄られると、それがとっかかりになって議論が活発になった印象があります。過去の文章や展示を下敷きにした作品もあれば、音声だけで立体を作ろうとする試みも提案されるなど、音声メディアの可能性や拡張性を実感させられます。私が並行して参加させていた『わかばリポーター講座』と比べて、音声ならではの表現をストックに追い求めるような講座のため、非常にクリエイティビティで脳が焼き切れそうになります。まだまだゴールからは遠いところに居る印象がありますが、次第に各々の作品の形が見えてくる(聞こえてくる?)と、受講者間での会話も弾んでいきます。ゼロイチで共通認識がつけられていく現場はとても楽しく、個人的にかなりエキサイティングです。

広報アドバイザー / 副島大輔

詳細レポート

音声で表現される美術作品のあり方、鑑賞の仕方、評価の仕方考えさせられる刺激的な会でした。今回で4回目のわかばキュレーター講座。受講生の方が持ち寄る作品案・パイロット版音声がだんだん正式版に近づいていき、最終的なラジオ番組としてどう着地させていくか、話せるようになってきました。

今回に大きな論点となったのは二つ。「作品によって批評するものさしを変えるべき」という話と、「音声表現では作品とキャプション(ガイド/ディスクリプション)の境界が曖昧になるのでは」という話です。

アイデアやパイロット版の音声として持ち寄られている作品たちは、既存のインスタレーションを音声で立ち上げようという試みもあれば、作者自身がエッセイを朗読するもの、普段写真で表現している思想を音楽的に表現した作品など、一口に「耳できくアート」といっても様々な枠組みの作品が集まっています。

作家の属性も現代美術の最前線にいる方から障害を持っている方で幅広く、それぞれの作家の背景に応じた適切なキュレーションや批評を行うことの重要性を主に花田先生からレクチャーいただきました。

アートの潮流に乗っているものなのか、よりポップなアール・ブリュットの作品なのか。また本当に美術の切り口から話してもいいのか(音楽やデザインなど違う領域の「コンテンツ」ではないか)。といったことを十分に考えていないとマトはずれな発言になってしまっ、自分にとっても作家にとっても無意味なものになりかねないといったことでした。

しっかり責任をもって、キュレーターとして発言しないといけないので難しいですね。もちろん私は批評できるような知見は全くないので、余計なことを言ってしまうないようにできるだけ黙っておこうと思いました。

もう一つの「音声表現では作品とキャプションの境界が曖昧になるのでは」という問いは個人的に思っていたことなのですが、例えば絵画などの一般的な美術作品はキャプションと作品の主従関係ははっきりわかりますが、「音声美術」の場合は作品もキャプションも音声ですから、鑑賞者によっては音声全体が作品のように捉えられるのでは、という話です……。文章で書くイメージ伝わりづらいですかね。これに対しては花田先生・三好さんから、作品とキャプションが明確に切り分けられないことを作品に活かさないかというアドバイスももらいました。また、キャプション(ディスクリプション)と音声の作品を連続的に聴かせることによって鑑賞体験をよくも悪くも制御できるのではというアイデアも出てきて、融通が効かないな〜と思っていた音声の特徴をうまくメリットに出来るかもしれないという自信が出てきました。音声だからこそ挑戦できることは何なのかということに常に考え続け、作家が音声で表現したことに意義があると感じられる作品に仕上げていきます。

広報アドバイザー / 副島大輔

第5回

ブラッシュアップ版発表 1 回目

11月10日(金) 18:30-20:30

予定では音声作品の完成版の確認であったが、音声作品や各自の進捗状況の確認となった。



第6回

ブラッシュアップ版発表 2 回目

11月24日(金) 18:30-20:30

最後の意見交換の場となり、音声作品をよりブラッシュアップさせた。



詳細レポート

リポーター講座よりも着地点が曖昧なキュレーター講座ですが、個人的には落とし所を見つけられる回になったと思います。前回の講座で完成版を提出されていた以外の方々も、具体的な収録方法を考えたり、いつ収録するのかという作家との折衝に入っているような段階です。制作や講師陣との対話を通じて、少しずつではありますが「キュレーター」が何をすべき役割であるか・作家とどういう立場にあるのかといったことが参加者の共通認識として共有できてきたのではないのでしょうか。私はというと、音声というメディアの特徴を活かして、リスナーの鑑賞体験をある程度制御できるのではないかという目論見を持つに至り、作家2名に協力してもらった音声を今回は提出しました。次回の講座までにこの音声をもとに実際に会って録音するという段取りです。

広報アドバイザー / 副島大輔

詳細レポート

最後の回ですが、すべての作品は揃っていません。ラジオでのオンエアに向けて収録を行う方たちの最終確認や詰めのフィードバックを行う回となりました。「正直私だったらこの作品録る自信ないな……。」と考える、非常にハードな録音に挑む方が2名いらっしゃったので、オンエアまでに間に合うかと気をもんでいました。(結果的に無事録音されたようで良かったです!)私はこの講座の前日、作家二人と録音する時間を録ったんですが作家がどうもしっくり来ず、オンラインで収録した Take1 を使うことになりました。せっかく集まって録音したのになんだかな〜という気持ちもありつつ、実際に会って録音してみないことには作品を構成する要素の重要性が分からなかったよなーと振り返っています。絵画であれば扱うモチーフや絵の技法、視点の置き方などが構成要素になってくるでしょうが、音声の場合(特に会話のスタイル)では、音質や話している内容、話者のトーン・リアクションなどが構成要素になってきます。オンライン録音していたときは、音質が割と作品のクオリティを左右するんじゃないか……?と思ったわけですが、実際に聴き比べてみると、私たちの作品で重要なのは話者の新鮮なリアクションと会話のトーンの方でした。音声を扱っている人からは「何を当たり前のことを」と言われてしまいそうなことではありますが、実際に体験して学ぶことで、音声というメディアを少しは自分のモノにできた気がします。(自分のことをキュレーターだと思えるのはまだまだ先になりそうですが……。

広報アドバイザー / 副島大輔

ラジオ収録の様子



わかばキュレーター講座の受講生作品を紹介する特別番組「耳で聴くアート 2023 キュレーター講座ラジオで成果発表展」は、12月5日(火) LOVE FMのスタジオにて収録が行われた。ラジオディレクター能崎氏立会のもと司会・進行はわかばキュレーター講座の講師でもある三好剛平氏(三声舎)が行い、「耳で聴くアート」の企画監修の花田伸一准教授(佐賀大学)も出演した。

特別番組は LOVE FM にて 12月19日(日) 19:00 ~ 20:00 の時間帯で放送された。

同番組は後日 SMAART 公式 YouTube, 公式サイトにも公開された。





三好 剛平 (三声舎代表)

〈耳で聴くアート〉とは何か。この半年間、私たちは多くの人々と一緒に考え続けました。いま振り返ってみると、その答えを拙速に固めようとせず、敢えて“問い”のままに置けたことが、このプロジェクトを本質へ近づける原動力になったように感じます。

ゲスト講師レクチャーでは、各分野の第一線で活躍する有識者6名とともに〈耳で聴くアート〉をお題に対話を重ねました。それぞれが専門分野の事例と視点を持ち寄り、互いに〈耳で聴くアート〉の輪郭を探り合う。時にはこちらが連想しようもなかった事例までもが〈耳で聴くアート〉へ手繰り寄せられ、また新たな問口が開かれる。“それっぽい言葉”で定義することを慎重に回避し、宙吊りの“問い”と付き合い続けることさえ出来れば、これほど豊かな気づきに開かれていくのかと毎回新鮮に驚かされるシリーズとなりました。全講座のダイジェストは、YouTube にアーカイブされた SMAART2023 のチャンネルに「ゲスト講座振り返り編 (23 年 11/22 公開分)」でも振り返っています。

それらゲスト講師レクチャーも参考教材としながら、実際に〈耳で聴くアート〉の展覧会をつくることに挑んだのが、9月からのキュレーター講座と、その成果発表となるラジオ特番の放送でした。

参加者は職業や年齢も異なる数名で、アート分野への経験値も人それぞれ。講座では〈耳で聴くアート〉を探究するより以前の、「キュレーターの仕事とは何か?」や「アートとコンテンツを分かつものとは何か?」といった前提認識を揃えるような議論も交えながら進行了ました。

ここでも、もし私たちが〈耳で聴くアート〉とは何かということに予め答えを用意していれば、参加者たちはもっと効率的に、何かノウハウめいたものを身につけられたかもしれません。しかし、アートマネジメント人材育成を目的とした今回の講座で重視したのは、まだ答えのない問いに対し、自ら仮説を立て、想定外に耐えながらもじっくり考えを深めていく姿勢、胆力でした。

講座の後半にも、参加者の提案するプランに対し「それは何を以てアートと言えるのか」「それは本当に〈耳で聴くアート〉という形式でしか表現出来ないものか」といったことを問い続けました。そのプロセスは、皆で少しずつ〈耳で聴くアート〉とは何か、そしてアートとは何かを再確認していく作業のようでもありました。

わずか3ヶ月という短期間で、容易に答えの出ない〈耳で聴くアート〉に自分なりの腹決めをし、作家と組んで展示を準備するという今回のプログラムは、決して難易度の低いものではなかったと思いますが、参加者は皆、出来る限りの力で奮闘しました(次年度以降は、参加者の受講意識やレベル感を揃えた「入門編」「実践編」などのスタイルで展開するのも良さそうです)。

分かりきった通説をなぞるのでなく、皆が知恵を寄せ合いたいくなるような良質な問いを準備することこそがこうしたプロジェクトの要であり、その成果は更なる時間と研究を重ねてこそ育まれていくものだと思います。〈耳で聴くアート〉とは何か。私たちはまだ、その入り口に立ったに過ぎません。次年度以降もこの大いなる問いを囲んで、引き続き色々な方々とその思考を深めていけたらと願っています。

受講生コンテンツ



8'13"

花火 ～障害をカミングアウトした夜～

アーティスト piasu / キュレーター 中田さとみ

私が勤務している就労継続支援 A 型事業所で、「AKARI」という情報記事サイトを運営しています。その中の記事をアール・ブリュット（障害者アート）として編集した作品です。

【この作品のきっかけ】アートってなんだろうと、初心者の自分は思い悩みます。今回、藤浩志さんの講座を聴講して、「やせ犬の狩りの時に豹変するエネルギーに美を感じた」というくだりにヒントをもらいました。前職で、一般就労の障害者枠で働く、若い身体障害の女性と知り合いました。彼女の芯の強さに心を打たれた事は、いまだに忘れられません。彼女の自分のハンデに負けないエネルギーの強さに美しさを感じ、これが私にとってのアートになるのではと、このコンテンツを作ってみました。これが正解なのかは分かりませんが、作者の piasu さんが、足掻きながらも懸命に生きている姿に、美しさを感じています。ご試聴、よろしくお願ひ致します。

● AKARI とは？

AKARI は生きていく上で「社会」や「自分自身」に何らかの障害を感じている方の手助けになる情報を発信し、共有するサイトです。AKARI の記事は、何らかの障害の当事者や支援者によって書かれています。AKARI は「生きづらさ」や「働きづらさ」を抱えている人から生の声を届けて、心の暗闇を照らすメディアを目指します。

AKARI

<https://akari-media.com/>

コンテンツの記事はコチラから

<https://akari-media.com/2020/08/31/member-845/>

● 作家 piasu から

はじめまして。私は障害を抱えている久留米市の 26 歳の女性です。ラジオ版と同じ障害を持っているため、今は一般の会社では働いてなくて、福祉サービスである就労継続支援 A 型事業所の TANOSHIKA というところで働かせてもらっています。TANOSHIKA では、ライターの仕事をしていて、今回は会社のホームページで綴った自分の気持ちをアートとして朗読してみました。障害を抱えている私が、大事な人に障害をカミングアウトする話です。私と同じく「生きづらさ」抱えた当事者である大切な TANOSHIKA の仲間が、音声編集をしてくれました。ラジオに出るということ、それは、また色々な人に自分の障害が伝わるので、第二のカミングアウトのような感じでかなり緊張しています。でも、

この朗読を聴いて、少しでも「わあ、自分だけじゃないんだ、安心したあ」って思ってくれる人がいたら、それだけですごく嬉しいですし、やる価値があったんだと思います。今回は、時間の関係で、途中までしか聴くことができないのですが、仲間と一生懸命作ったので良かったら聴いてくれるとすごく嬉しいです。

文・朗読 piasu (ピラス) 編集 田中稔久 (たなかとしひさ)



7'15"

TRANS

アーティスト 高梨麻梨香 / キュレーター 中尾絵里

〈アーティストコメント〉

サンプリングの歴史は、ヴァルター・ロットマンが 1930 年にラジオ番組内で発表したサウンド・トラックをコラージュした作品「週末」が起源とされています。その後、環境音や生活音といった「ノイズ」をサンプリングし、楽曲に取り入れていくミュージック・コンクレートやサウンド・スケープという概念が生まれていきます。

1 私はいつも、ミュージック・コンクレートとサウンドスケープのちょうど狭間のものを「音」として発表することが多いです。したがって、上記の文脈に沿って作品を制作しようと思いました。冒頭はサンプリングした環境音を加工したミュージック・コンクレートから始まり、虫の音・歩く音を契機にサウンド・トラックを差し込んでいます。福岡県に所縁のある無頼派・檀一雄とも親交がある中原中也の詩の一節を朗読した後、冒頭のミュージック・コンクレートの元の素材である海の音を聴取し、突如終わりを迎え、現実に戻り戻すような体験になるように設計しました。途中読み上げられる詩は、中原中也著作「妹よ」の一説です。中原中也著作「妹よ」は、宮沢賢治が妹に対してよんだ詩にインスパイアされて制作された追悼の詩です。

2 日本だけでなく、海の向こう側では今もなお悲惨な出来事が繰り返されています。遠くの誰かを偲んでつくられた詩を引用（サンプリング）するのが望ましいと思いました。時間や空間でつながった総体としての「海」は、秩序と混沌、破壊と生成、災いと富、寄せては返す波、引力による潮の満ち引きなどの要素を常に抱えながらダイナミックに動いています。今回は「海」のもつ両義性や越境性に着目しました。今いる自分の座標から、遠くかけ離れた場所へと意識が向いてほしいという願ひを込めて、「TRANS」と名付けました。

● 参考文献

- ① 「フィールド・レコーディング 現代美術用語辞書 ver.2.0」, Art scape, <https://artscape.jp/artword/index.php/> フィールド・レコーディング
- ② 中原中也著, 「山羊の歌」, 「妹よ」より一部抜粋



TRANS ~ 作者インタビュー ~

アーティスト 高梨麻梨香 / キュレーター 中尾絵里

36'46"



『結び』八女津媛女神の思い

アーティスト 森 修 / キュレーター 中尾絵里

神々の思いを乗せて

6'33"



固有名詞を持たぬ者たち

アーティスト 土屋貴哉 / キュレーター 大津信輔

13'38"

《固有名詞を持たぬ者たち》は、2023年、佐賀大学美術館で開催された「響きあうアート-美の拡がり、美術の拡がり-」において出展されたインスタレーション作品。簡単な説明を伴った様々な人物描写が淡々と並列的に文字で显示されており、観る者は館内の廊下や展示室等の空間を回遊しながら鑑賞する。

本作品はこれまで、水滴での描写やタブロー化、SNS上への展開など、表現手法を広げてきたところである。今回はこの作品を音声作品化することにより「耳で聴くアート」展における展示を試みたものである。音声作品として展示するに当たり、アーティストが指示書(Instruction of a work)を作成し、それにキュレーターが音声化を行った。指示書では、発話者の年齢や国籍、人数などの条件、音読の方法や収録環境、著作権の取り扱い等について定められている。



固有名詞を持たぬ者たち

アーティスト 土屋貴哉 / キュレーター 穴瀬聖

14'04"

本作品は、これまでインスタレーションによる実空間でのアプローチ、ガラス・水滴等を用いた物質的アプローチ、SNSやNFTによるオンライン上でのアプローチ等、多様なメディアや形式を横断し展開されてきた土屋氏の作品「固有名詞を持たぬ者たち」を、音声作品として収録したものである。作家の記憶や経験から立ちあがる人物像は聴覚を通して聴き手の個々の記憶に結びつき、人物に対してそれぞれの眼差しがうまれる。



耳で聞くアートについて語る

アーティスト オレクトロニカ / キュレーター 見藤素子

30'45"

美術ユニット・オレクトロニカに「形を持たない作品・展覧会」の制作を依頼したところ、思わぬ方向に。体験や造形を大切に作る作家が形のない作品を考えるにあたって、根本的な問題を問う結果となりました。これは、作品を作ろうとした混沌の記録です。対話の中で作品を形作ることを当初の目論見としていましたが、耳で聞くことと造形、そして人間の感覚についてオレクトロニカは改めて考えました。



TTC 大解剖展

31'17"

アーティスト オチボ / キュレーター 見藤素子

コンゴ共和国で発見された環形生物・TTC（ティルム・ティタン・コルプス）の研究成果展が国立環形生物研究所で1月1日～1月30日まで開催されます。プレスリリースとして研究員がTTCと展示の見どころについて解説します。現実世界では実現化不可能な展示も耳で聞く世界なら変幻自在。音声世界で展示を行う時、それは耳で聞く時のみ現れるアートとなるのかもしれないと考えました。現と幻を行き来する、想像の中の展覧会へようこそ。アーティスト・配信者を兼任する研究者に分野横断をしていただき、専門家ならではの架空の展示を語っていただきました。これは、SNS上で公開収録されたものです。

アーティスト（研究員）：オチボ
制作：コレクティブチーム・炭酸温泉



音沙汰がある

8'37"

アーティスト 森崎淳 / キュレーター 副島大輔

- ① 森崎が録音した音 ② 森崎と大石の会話 ③ 森崎が録音した音



流れ

10'29"

アーティスト 大石妙飯 / キュレーター 副島大輔

- ① 大石が録音した音 ② 大石と森崎の会話 ③ 大石が録音した音



耳で聴くアート2023 キュレーター講座 ラジオで成果発表展【LOVE FM】

58分39秒

アートを取り巻く世界が多様化の一途をたどる中、佐賀大学では「佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート＝SMAART」を立ち上げて、アートをマネジメントする人材を育成する活動を行っています。

今年9月～11月にかけて佐賀大学芸術地域デザイン学部によって開講された耳で聴くアート「わかばキュレーター講座」。

音声メディアを主体とした美術展の企画・発信ができるキュレーターの育成を目的とし、6名の社会人が講座に参加しました。

今回の特別番組では、実際の講座で受講生が企画した音声メディアを中心とした美術作品＝「聴くアート」の作品を一挙公開します。



耳で聴くアート2023 キュレーター講座 ラジオで成果発表展 特別編【LOVE FM】

1時間5分38秒

インターネットのみ公開している特別編では、ノーカット版をお届けします。ラジオ放送時に時間の制約上カットされたトークや、悩み抜いて絞り出した言葉の「間」など、収録時の様子をお楽しみください。

受講生の感想より

キュレーターとして作家や作品に敬意を持ちつつ、どこまで踏み込むのか、責任を持って対応するのか改めて考えるきっかけとなった。自分の担当している作品では出なかった考えや作品との向き合い方が他の受講生の発表や意見の共有で知ることができ良い機会となった。

実際に作品が形になり、ドキドキしながら受講しました。たくさんのアドバイスをいただき、嬉しかったです。

「耳で聴くアート」という新しいものについて、講座の中で受講生同士や先生とディスカッションし、共通理解を得ていくという過程で、たくさんの学びがありました。また、個人のキュレーション作品づくりも良い経験になりました。

作者が伝えたいイメージとキャプションの間に作品があるということがわかり、鑑賞者は最後の最後にできたキャプションから作品に入るんだな、と感じました。作品や作者が伝えたいイメージ、作品を鑑賞者に翻訳する役割なのがキュレーションなんだなとつかめてきました。

アートシーンに於いて作家の属性でアールブリュットと区別される構造や、オリンピックとパラリンピックの報道量の差、24時間テレビなど、マジョリティがマイノリティに「手を差し出す」のではなくマイノリティが長年にわたって発してきた言語をいかに拾えるかマイノリティにマジョリティが「手を取り合わせてもらう」かを考えるのも、耳で聴くアートの姿勢なのかなとも思いました。

まとめ



撮影：安田有里 © Ko Na design

若林 朋子（プロジェクト・コーディネーター／立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科特任教授）

活動 1：アートを学ぶ

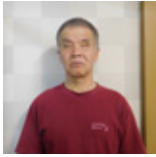
「耳で聴く」をテーマに、美術教育プログラムの試行実験を行ってみようという、発想そのものが興味深い。しかも、実験に参加してもらうのは、美術を専門的に学ぶ芸術科に通っていたり、美術部に在籍していたりする高校生と、高校の美術教員である。美術に近いところにいる高校生たちに、この試みはどう響くのか。今までにない表現・鑑賞教育の方法に、美術教員はどのような反応を示すのか——果たして、この試み（目論見？）は、かなりの手ごたえがあったようだ。感想によく表れている。ルールや型がないから自由に自然に自分で表現できておもしろい、友だちの異なる考えを聞くことが楽しい、アートは目で見える形だけではないことがわかった等、高校生たちは新たな美術との向き合い方に出会った様子。教員も総じて生徒の解釈や表現の違いに驚き、他者との違いを楽しめることが魅力であると、耳で聴くアートの教育プログラムの可能性を指摘している。来年度の教材化に期待したい。

活動 2：アートを伝える

わかばリポーターたちから「耳で聴くアート」を伝えられる経験をして、発見があった（発見という言葉自体が視覚よりだと今気づく）。耳で聴くアートは、「伝える人」の個性がより立ち現れてくるのである。これまで体験してきた「目で観るアート」は、観ている作品に神経のほとんどが持っているからか、作品の伝え手本人（解説者・ナレーター・広報担当・コメンテーター・テキスト執筆者など）に思いを馳せることはなかった。伝えられた情報を頭に入れつつ、もっぱら目で作品を観ている。いわば「ながら観」である。他方、耳で聴くアートでは、リポーターそれぞれの個性も楽しんでいる自分がいた。声色、語りのテンポ、独特の間合い、掛け合いの妙…。耳で聴くアートは、伝える人自体が前景化してくるのだ。「ながら聴き」にならない。リポーターのことも、リポーターが伝える作品のこともイメージしようと脳内がうごめく。この現象をどう生かすか、伝え手の腕の見せどころである。

活動 3：アートを届ける

「耳で聴くアート」のキュレーションにあたって、今回は手厚いプログラムが組まれた。錚々たる顔ぶれの講師によるオンラインレクチャーでは、アートが生み出され、受け手に届くまでの多様な事例を、耳から吸収。並行して行う企画会議では、プロのラジオディレクターらの丁寧な助言で、実際にわかばキュレーターたちが自身の企画を練り上げていく。「耳で聴くアート」をゼロから企画するにあたって、専門家が伴走するこの仕組みは秀逸だ。実際に形になったわかばキュレーターたちのコンテンツは、自分が想像していた「耳で聴くアート」とは異なる形が多かった。耳で聴くアートはキュレーションの幅が相当広く、耳で聴くという行為もまた聞き手の想像力を拡張することに気づかされた。添えられた解説テキストの存在が、コンテンツの届け方を大きく左右することも感じた。解説テキストなしの耳で聴くアートは成立するのかなど、興味は尽きない。来年の耳で聴くアート展が楽しみだ。



濱田 庄司 (ギャラリーコンパ)

幾つかの印象の残った人の物を書かせて貰うとしたならば、まずは講師の藤浩志さんじゃないでしょうか。108 のやせ犬・お米で作った蛙、一か月分のお給料を使っただけの作品など、ドラマティックで聞くアートの中で、なにか今後幾つかのキーワードを伝えていただけるのではないのでしょうか。

そして田中みゆきさんについては、私自身の日頃というか日常ごとでもあり、またギャラリーコンパという活動を行なっている中、なにかと考え感じさせられるポイントばかりでした。

榎木野衣さんは、意外なところから気付かせて貰えたこととしてなんとと言っても私は、『夢は目では見てない』という当然なことを改めさせられたということです。

受講生の中からとしてはまずは、中尾絵里さんでしょうか。中尾さんは幾つかのコンテンツに出ておられるのですが、彼女独特の個性というか、フワリとしたキャラクターがコンテンツその物に上手く活かされているようですね。

副島大輔さんについては、若者らしいシュールな二人のトークが、なんともと言えなくて面白く楽しく、後から付いて行きたいような気分となったところだったでしょうか。

このような、聴くアートによるコンテンツを聴きながら、今現在考え感じていることは、関わられている皆さんもそうだと思うのですが、耳で聴くということは他の感覚が無意識のうちに連動してしまうんだなとも。それこそ、味覚は嗅覚があってこそその旨味を感じるのですから。でもそこで、聴くアートということ突き詰める研究の深さと面白さを目指しつつ、なにかが見えてくるのではないかという企画なのではないでしょうか。私も、それを見たくもあります。

最後に、このような講師や受講生のコンテンツを聴いていて私自身としては、この年齢で様々な人間というか人はいるので頭では知ってはいるのですが、実際コンテンツを聴きつつ、世の中は広いな、そして自分の知識のなさや、視野の狭さを実感させられることばかりで、この企画へ参加し加えさせていただいたのも、今後のことを考えれば、生きていた時の良き財産にもなるのではとは感じてはいますし、なにかの糧となればとも思ったりもしてはいます。

アートのモバイル化と孤独について

昨年度(2022年度)に引き続き「耳で聴くアート」に取り組んだ。前回同様、今年度も忠聡太さん・鶴田弥生さんを講師にお迎えしての「わかばリポーター講座」を開講。また今年度から新たに三好剛平さんの力を借りて6名のゲスト講師によるレクチャーシリーズと「わかばキュレーター講座」を開講した。11～1月には佐賀県・福岡県・長崎県の6つの高校を訪ね、主に美術部員を対象に「耳で聴くアート」をめぐるミニレクチャー&ディスカッションを行った。次年度2024年度でいったん一区切りの予定である。

さて、この「耳で聴くアート」事業はアートマネジメント人材育成プログラムとして企画・運営されているものの、カリキュラムや目標設定、着地点などはあまり厳密に定めておらず、手探りで運営しながら、内容や方針はそのつど軌道修正されたり後付けされたりしている。

本事業が一体どこに着地するのか、そこにどのような意義があるのか、正直に言えば企画者である私にもよく分からない。したがって本稿では当初「耳で聴くアート」を構想しはじめたときに漠然と考えていたことを記しておこう。本企画の背景にある問題意識は以下のとおり複数の要素が挙げられるが、これらはどれも繋がっているように思う。

まずはアートの「実物志向」「現場志向」への疑問。アートの世界では、実物を見ること、現場に足を運ぶことが良いこと、大事なことでとされることが今でも多い。そのことに私も基本的には賛同しつつ、一方で、それでは移動の自由を持たない人、持てない人はどうなるのかとの疑問が拭えない。身体的・精神的・経済的・時間的・社会的、様々な理由から移動がままならない人はアートの世界から疎外されたままで良いのか。自由に移動できずともアートに触れられる機会を作り、提供することはこれからのキュレーターの急務ではないのか。

次にアートの「リモート化」への疑問。2020年以降、新型コロナ禍のもとオンラインでアートを体験できる機会が急速に増えた。上の問題意識に照らせば移動せずにリモートでアート体験できることは喜ばしいのだが、映像・音声情報の精度が上がると、それに見合う情報処理速度を保つデジタル機器と通信回線が必要になってくる。話題がやや逸れるがコロナ禍の下、オンライン授業をしていた折、機器や回線が不十分なせいで途中「落ちて」しまう学生を多く見た。十分な機器と回線を持たない者はどうしたら良いのだろうか。また仮に十分なスペックを確保できて展示会場やライブ会場をまるで現場にいるかのように精度高くバーチャル体験できたと、現場優位・実物優位であることには変わらない。実物・現場情報の代替や補完、つまり二次体験としてのリモート化ではなく、鑑賞者のいる場所がそのまま一次体験の現場となるような鑑賞機会は作れないだろうか。ハイスペックな機器や回線を持たずとも一次的にアートに触れられる機会を作り、提供することはこれからのキュレーターの急務ではないのか。

最後にアート体験の「孤独」さについて。筆者は芸術文化による地方創生を謳う学部にて2016年4月の開設時から籍を置いている。間もなく8年経つが教員も学生も端的に「地域疲れ」しているように思う。筆者自身、2000年代初頭より地域活性化の文脈に沿ってアートプロジェクトや展示会を多く手がけ、交流を促したり地域資源を再発見したりと、そのような現場に喜びを感じるからこそ仕事を続けていられるのだが、一方で、いつも「孤独」が足りないように感じている(孤立ではなく)。「地方創生」や「地域活性化」などの文脈で語られるときの「地域」という語から連想されるイメージが広告代理店的あるいはマスメディア的なものに偏っていることからくる強迫観念のせいではないかと感じている。私たちはいつでもどこでも笑顔ではいられない。町づくり、賑わいづくりも良いが、アートの視点に立つならば、それよりも前にまずは人づくりが必要だろう。アートの機能はしっかりと孤独と向き合い、自分の存在を引き受けた上で社会と切り結ぶことにあるように思う。心理的な安全保障を考えても孤独と向き合う時間的・精神的余裕が社会には不可欠なはずだが、今の社会は繋がりがすぎるのではないか。見守りと監視・管理とが区別されないまま、私たちは24時間365日「見られる」体制に身を晒されている。アートにおいては、時間と空間を共に体験すること、つまり人々と同期する喜びも重要だが、それと同じくらい孤独な時間と空間を確保できること、つまり人々と同期しないことも重要だ。「耳で聴く」アートは時間と空間を共有せずに孤独の中で体験することを前提に想定しはじめた。といいつつ、この辺りのことはまだうまく言語化できていない。今後また手探りで進めていきつつ何らかの言葉を後付けしていきたい。

花田 伸一 (キュレーター / SMAART企画監修 / 佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授)

音声コンテンツ一覧 Audio Contents

活動 2 | アートを伝える人の育成

| | |
|---|-----------------|
| 中尾 絵里 「カメラ アイ - ネット限定 スペシャルコンテンツ版」 | 2023年 12月 16日配信 |
| 高 沛遙 「地域とアートの繋ぎ方ーつなぎ美術館インタビュー」 | 2023年 12月 16日配信 |
| 副島 大輔 「見上げる二人」 | 2023年 12月 16日配信 |
| 古賀 隆正 「ヨルノムコウガワ」 | 2023年 12月 16日配信 |
| 「耳で聴くアート 2023 リポーター講座ラジオで成果発表展(アフタートーク付)【CROSS FM】」 | 2024年 1月 24日配信 |

活動 3 | アートを届ける人の育成

| | |
|---|-----------------|
| アーティスト piasu / キュレーター 中田さとみ 「花火～障害をカミングアウトした夜～」 | 2023年12月 19日配信 |
| アーティスト 高梨麻梨香 / キュレーター 中尾絵里 「TRANS」 | 2023年 12月 20日配信 |
| アーティスト 高梨麻梨香 / キュレーター 中尾絵里 「TRANS-作者インタビュー」 | 2023年 12月 20日配信 |
| アーティスト 森 修 / キュレーター 中尾絵里 「『結い』八女津媛女神の思い」 | 2023年 12月 20日配信 |
| アーティスト 土屋貴哉 / キュレーター 大津信輔 「固有名詞を持たぬ者たち」 | 2023年 12月 20日配信 |
| アーティスト 土屋貴哉 / キュレーター 穴瀬聖 「固有名詞を持たぬ者たち」 | 2023年 12月 20日配信 |
| アーティスト オレクトロニカ / キュレーター 見藤素子 「耳で聞くアートについて語る」 | 2023年 12月 20日配信 |
| アーティスト オチボ / キュレーター 見藤素子 「TTC大解剖展」 | 2023年 12月 20日配信 |
| アーティスト 森崎滯 / キュレーター 副島大輔 「音沙汰がある」 | 2023年 12月 20日配信 |
| アーティスト 大石炒飯 / キュレーター 副島大輔 「流れ」 | 2023年 12月 20日配信 |
| 「耳で聴くアート 2023 キュレーター講座ラジオで成果発表展【LOVE FM】」 | 2024年 1月 24日配信 |
| 「耳で聴くアート 2023 キュレーター講座ラジオで成果発表展 特別編【LOVE FM】」 | 2024年 1月 24日配信 |

活動 3 | アートを届ける人の育成 〈レクチャー動画〉

| | |
|-------------------------|-----------------|
| イントロダクション編: 三好剛平 × 花田伸一 | 2023年9月 14日配信 |
| ゲスト講師: 毛利嘉孝 | 2023年 9月 19日配信 |
| ゲスト講師: 中野仁詞 | 2023年 9月 19日配信 |
| ゲスト講師: 藤浩志 | 2023年 9月 19日配信 |
| ゲスト講師: 田中みゆき | 2023年 10月 11日配信 |
| ゲスト講師: 川上幸之介 | 2023年 11月 5日配信 |
| ゲスト講師: 榎木野衣 | 2023年 11月 12日配信 |
| ゲスト講座振り返り編: 三好剛平 × 花田伸一 | 2023年 11月 22日配信 |

全体

| | |
|-----------------------|---------------|
| 「講師・アドバイザーによる振り返り(仮)」 | 2023年 2月 公開予定 |
|-----------------------|---------------|

事業成果物 Web Site / Flyer

ウェブサイト

サイトデザイン
山口恵美 (CW-BAKU inc.)

サイト構築
株式会社 EWM ファクトリー

<https://www.art.saga-u.ac.jp/smaart2023/>



受講生募集チラシ

A4 / 両面カラー / 上質 90K
印刷：株式会社グラフィック

デザイン
山口恵美 (CW-BAKU inc.)



講師紹介 Navigator

活動2 | アートを伝える人の育成 ~耳で聴くアート放送局



講師

忠 聡太 (福岡女学院大学 人文学部 メディア・コミュニケーション学科 講師)

ポピュラー音楽を中心に近現代の文化とメディアを研究する。史資料に基づく基礎的な調査に加えて、音楽イベントの企画や素朴な複製技術を駆使したワークショップなどをつうじた批判的なメディア実践に取り組んでいる。福岡女学院大学人文学部メディア・コミュニケーション学科講師。

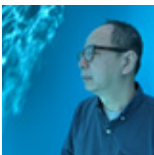


講師

鶴田 弥生 (ディレクター兼ラジオパーソナリティ)

ラジオ番組を中心に音声メディア・コンテンツの企画制作・出演、イベントの企画制作・出演、ライターなど。2012年起業。2016年に論文「ローカル番組に関するブランディング・コミュニティの研究」を執筆しMBA習得、「Best Leadership Award」受賞。情報発信や音声メディアの可能性、メディアリテラシーについて若者が学ぶ場としての番組も担当。

活動3 | アートを届ける人の育成 ~耳で聴くアート展準備室



ゲスト講師

毛利 嘉孝 (社会学者 / 東京藝術大学 大学院 国際芸術創造研究科 教授)

1963年生。社会学者。専門は文化研究／メディア研究。東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科・音楽学部音楽環境創造科教授、未来創造継承センター長。京都大学経済学部卒、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ MA (Media & Communications)、同 Ph.D. (Sociology)。九州大学大学院比較社会文化研究科助教授等を経て現職。特に現代美術や音楽、メディアなど現代文化と都市空間の編成や社会運動をテーマに批評活動を行う。主著に『パンクシー』（光文社新書）『ストリートの思想』（NHK出版）、『文化＝政治』（月曜社）、編著に『アフターミュージッキング』（東京藝術大学出版会）、共著に『芸術と労働』（水声社）『コミュニケーション資本主義と〈コモン〉の探求』（東京大学出版会）等。Inter-Asia Cultural Studies (Routledge)、World Art (Routledge)、International Journal of Japanese Sociology (Wiley) などの国際雑誌に論考を寄稿している。



ゲスト講師

川上 幸之介 (美術家・キュレーター / 倉敷芸術科学大学 芸術学部 准教授)

倉敷芸術科学大学准教授／キュレーター 主なキュレーションに「1923」「The Third Entity」「ラディカルデモクラシー」「Punk! The Revolution of Everyday Life」「Bedtime for Democracy」「Reinventing the "F" word: feminism!」ほか。教育プロジェクトでは、ジョン・バルデッサリ、イム・ミヌク、アントン・ヴィドクル、ホー・ルイ・アン、ジェレミー・デラー、ナイーム・モハイエメンなどと協働。
<https://kawakamilabo.com/>



ゲスト講師

藤 浩志 (美術家 / 秋田公立美術大学 大学院 複合芸術研究科 教授、秋田市文化創造館館長)

鹿角島生まれ。京都市立芸術大学在学中演劇活動に没頭した後、地域をフィールドとした美術表現を志す。同大学院修了後パプアニューギニア国立芸術学校に勤務し、原初的表現と人類学、社会学、ヤセ犬に出会う。バブル崩壊期の土地再開発業者・都市計画事務所に勤務し、土地と都市を学ぶ。全国各地の芸術祭、文化施設をはじめ、様々な空間でのプロジェクト型の表現を実施。十和田市現代美術館館長、秋田公立美術大学副学長を経て現職。



ゲスト講師

榎木 野衣 (美術評論家 / 多摩美術大学 美術学部 教授)

美術批評家。山間の秩父に生まれ、京都の同志社で哲学を専攻。のち東京に移り、1991年に最初の評論集『シミュレーションニズム』(1991年、増補版=ちくま学芸文庫)を刊行、批評活動を始める。おもな著作に『日本・現代・美術』(新潮社、1998年)、『戦争と万博』(2005年)、『後美術論』(2015年、第25回吉田秀和賞)、『震美術論』(2017年、平成29年度芸術選奨文部科学大臣賞、いずれも美術出版社)ほか多数。キュレーションした展覧会に「アノーマリー」(レントゲン芸術研究所、1991年)、「日本ゼロ年」(水戸芸術館、1999-2000年)ほか、監修に『日本美術全集 19 拡張する戦後美術』(小学館、2015年)などがある。1985年の日航機123便御巣鷹の尾根墜落事故を主題とする戯曲に「グランギニョル未来」(2014年)、福島の高野山難民区域で開催中の「見に行くことができない展覧会」「Don't Follow the Wind」では実行委員を務め、アートユニット「グランギニョル未来」(赤城修司、船屋法水、山川冬樹)を結成、展示にも参加している。



撮影：道谷征司

ゲスト講師

中野 仁詞 (神奈川芸術文化財団 [神奈川県民ホール / KAAT 神奈川芸術劇場] 学芸員)

公益財団法人神奈川芸術文化財団(神奈川県民ホール / KAAT 神奈川芸術劇場)学芸員。キュレーター/第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展(2015年)日本館「塩田千春 掌の鍵」、横浜トリエンナーレ2017「島と星座とガラパゴス」。1968年、神奈川県生まれ。慶應義塾大学大学院美学美術史学専攻前期博士課程修了。主な企画に、パフォーマンス・アーツでは、音楽詩劇 生田川物語・能「求塚」にもとづく(創作現代能、2004年、神奈川県立音楽堂)、アルマ・マラーとウィーン世紀末の芸術家たち(音楽・美術、06年、同)、生誕100年ジョン・ケージせめぎあう時間と空館(音楽・ダンス・美術、11年、神奈川県民ホールギャラリー)ほか多数。現代美術展では、神奈川県民ホールギャラリーにて、塩田千春「沈黙から」(07年)、小金沢健人「あれとこれのあいだ」(08年)、「日常/場違い」(09年)、「デザインの港。」浅葉克己(09年、10年)、泉太郎「こねる」(10年)、「日常/ワケあり」(11年)、さわひらき「Whirl」(12年)、八木良太「サイエンス/フィクション」(15年)、大山エンリコイサム「夜光雲」(20年-21年)、「ドリーム/ランド」(22年-23年)。KAAT 神奈川芸術劇場にて、「日常/オフレコ」(14年)、「突然ミュージアム」(15年、16年)、塩田千春「鍵のかかった部屋」(16年)、「詩情の森」-語り語られる空間&オーブンシアター(17年)、さわひらき「潜像の語り手」(18年)、小金沢健人「Naked Theatre-裸の劇場」(19年)、宮永亮「KAA10」(20年-21年)、富安由真「漂泊する幻影」(21年)、志村信裕「游動」(21年)、鬼頭健吾「Lines」(22年)、アトリウム映像プロジェクト(15年-)。ほか、塩田千春(那覇市立なはーと、21年)、コネクションズ-さまざまな交差展(小田原三の丸ホール、22年)。



ゲスト講師

田中 みゆき (キュレーター / プロデューサー / アクセシビリティ研究)

「障害は世界を捉え直す視点」をテーマにカテゴリにとらわれないプロジェクトを企画。表現の見方や捉え方を障害当事者や鑑賞者とともに再考する。近年の仕事に映画「ナイトクルージング」(2019年)、「音で観るダンスのワークインプログレス」(2017-2019年、KAAT 神奈川芸術劇場)、「ルール?展」(2021年、21_21 DESIGN SIGHT)、展覧会「語りの複数性」(2021年、東京都渋谷公園通りギャラリー)など。ACCの助成を得て2022年7月から12月までニューヨーク大学の客員研究員としてニューヨークに滞在。2025大阪・関西万博 日本館基本構想クリエイター。東京工業大学リベラルアーツ教育研究院非常勤講師。

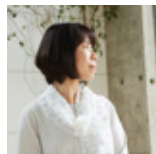


モデレーター

三好 剛平 (三声舎代表)

福岡から文化芸術にかかわるプロジェクトを中心に企画・制作、執筆等を行う。アジア映画の上映・交流企画「Asian Film Joint」主宰(2021~)。福岡~九州のアート・カルチャーシーンを発信するラジオ番組「明治産業 presents OUR CULTURE, OUR VIEW」製作・出演(2018~)ほか。

全体

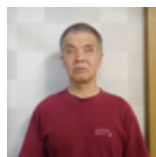


撮影：安田有里 © Ko Na design

アドバイザー

若林 朋子 (プロジェクト・コーディネーター/立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科特任教授)

デザイン会社勤務を経て、英国で文化政策とアートマネジメントを学ぶ。1999～2013年公益社団法人企業メセナ協議会に勤務。プログラム・オフィサーとして、企業が行う文化活動の推進と芸術支援の環境整備に従事。在職時からメセナ活動の評価について調査・研究を重ねる(エピソード評価・ピアレビュー)。2013年より個人事業主。各種事業の企画・コーディネート、助成プログラムの企画開発・審査、調査研究、芸術文化団体や公益法人の運営支援、自治体の文化政策支援などを行っている。社会人大学院では文化政策、非営利法人制度、助成と評価の授業を担当。



アドバイザー

濱田 庄司 (ギャラリーコンパ)

「ギャラリーコンパ」は、視覚障がい者と晴眼者が、目の見える見えないといった互いの個性を活かし合い、共に語らいながらアート鑑賞を行うワークショップである。市民活動として2005年に始動し、主に北部九州の美術館やギャラリーで年3、4回のペースで開催している。



テクニカルサポーター

江頭 宗次郎 (ノギ「コーヒー無料の作業場」主宰)

98年生。21年佐賀大学経済学部経営学科卒業。佐賀大学在学中にアカベラライブや学生で語り合う定期YouTubeライブ「語らい会」を企画。22年「ちくごアートファーム計画2021 はたらくアート」オンライン配信サポート担当。「SAGA-DAI-HATSU ART PROJECT」インタビュー映像の撮影・編集担当。



広報アドバイザー

副島 大輔

1999年生。佐賀大学芸術地域デザイン学部卒業後、佐賀市内のWeb制作会社でディレクターとして勤務中。SMAARTには大学在学中に受講生として参加経験あり。



企画・監修

花田 伸一 (キュレーター/佐賀大学 芸術地域デザイン学部准教授)

1972年福岡生。北九州市立美術館学芸員、フリーを経て2016年より現職。主な企画『6th 北九州ビエンナーレ～ことのはじまり』『ながさきアートの苗プロジェクト2010 in 伊王島』『街じゅうアート in 北九州2012 ART FOR SHARE』『ちくごアートファーム計画』『佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート』。企画協力『第5回福岡アジア美術トリエンナーレ2014』『釜山ビエンナーレ2014 特別展』他。

佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート 2023 耳で聴くアート

令和5年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業

～オーラルコミュニケーションを核としたアートマネジメント人材育成事業

主催：佐賀大学芸術地域デザイン学部

協力：佐賀大学美術館

後援：LOVE FM、CROSS FM

佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート事務局 令和5年度企画運営スタッフ

花田伸一（キュレーター / 芸術地域デザイン学部准教授）

甲斐夕加里（企画運営スタッフ）

江頭宗次郎（テクニカルサポーター）

副島 大輔（広報アドバイザー）

芸術地域デザイン学部総務

佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート 2023：耳で聴くアート 記録集

発行日 2024年2月

編集 花田伸一 / 甲斐夕加里

写真 長野聡史（長野聡史写真事務所）

※ pp. 11（下3枚）、18、19、20、22、23、25、28、35（下2枚）

デザイン 山口 恵美（CW-BAKU inc.）

発行 佐賀モバイル・アカデミー・オブ・アート事務局

佐賀大学芸術地域デザイン学部

〒840-8502 佐賀市本庄町1番地

TEL：0952-28-8349

公式 Web サイト <https://www.art.saga-u.ac.jp/smaart2023/>